

「富」という枷

— 『ある夫人の肖像』 (*The Portrait of a Lady*) に見る経済性 —

堤 千佳子

序

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) の作品、特に後期のものについては経済性を内包した作品であると評されることが多い。円熟期 (Major Phase) と称される3作品『使者たち』 (*The Ambassadors*), 『鳩の翼』 (*The Wings of the Dove*), 『黄金の盃』 (*The Golden Bowl*) については特に顕著である。ジェイムズが活躍した19世紀から20世紀にかけての時期は近代と言う範疇に分類され、産業資本主義が始まる時期でもある。これらの作品の中には、大衆消費社会、顕示的消費、資本主義の中心地の変遷、富の蓄積、人間の商品化など多くの要素が単独で、あるいは複雑に絡み合っており、プロットの中で重要な役割を果たしている。これは消費社会の成立が1880年代とする研究がなされていることから実証される。(Bronner 6-7)

このような視点から捉えると、これらの作品を従来の新世界アメリカ対旧世界ヨーロッパという対比、国際テーマという考え方だけではなく、経済力によって相手を支配する側と支配される側、搾取する側と抑圧される側という分類が行われていると考えることが可能である。この場合、経済力を持ち、相手を圧倒する力を持っているのはアメリカ人であり、初期の作品にあるように文化的搾取を受ける側から、経済、もっと言えば金の力で支配権を持つ立場に置かれることとなる。

但し初期の作品と同様にこのプロットを作り出すことに大きな関わり、あるいは主導権を持つのもアメリカ人である。またアメリカの経済力に関するジェイムズの捉え方の変遷として二十数年ぶりにアメリカを訪れたジェイムズがアメリカ経済の発展に伴う都市、特にニューヨークの変貌振りに驚愕の念を抱いたことが『アメリカの光景』 (*The American Scene*) においては描かれている。この時期の急速なアメリカ人の拝金主義的な姿勢に驚愕しジェイムズが幼少期を過ごしたニューヨークの過去の風景が一掃されてしまい、画一的な様相が作り出されてしまったことを嘆じている。(57)

本稿においては初期の集大成ともいえる『ある夫人の肖像』 (*The Portrait of a Lady*)

を取り上げ、作品中にみられる経済性について検証していく。

I

初期の作品の中でも、「デージー・ミラー」(“Daisy Miller”)においては文化的衝突だけでなく、アメリカが経済的に台頭してきた時代を背景に、親子がそれぞれ経済活動を象徴するものとして描かれている。父親は仕事に熱中するあまり家庭を顧みないビジネスマンであり、娘は彼の財産、成功を顕示するモデルの役割を果たす。ここではアメリカの財力がヨーロッパを席卷するかのようである。デージー(Daisy Miller)の態度には唯物的史観が見え隠れしている。アメリカンマナーを象徴するものとして、パリの最新のモードをまとう姿は、ジェームズの友人でもあるイザベラ・スチュワート・ガードナー(Isabella Stewart Gardner)の振る舞いにも類似している。

新参者のアメリカ人、いわゆるニューリッチを排除しようとするアメリカ人社会を代表するコストロ夫人(Mrs. Costello)、ウォーカー夫人(Mrs. Walker)、ヨーロッパに長く滞在したために、アメリカ人としてのアイデンティティが薄れ、自らの判断に自信が持てず、デージーの本当の姿を知らないまま彼女を見捨ててしまったウィンターボーン(Winterbourne)、抜け目なくデージーに取り入り、彼女を非難の渦に巻き込むこととなるジョヴァネリ(Giovanelli)など、作中に登場する人物たちは類型化されている。のちの作品にも登場するような典型的な人物像も描かれているが、内面などについてはまだ踏み込まれることもなく、やや平坦な造形となっている。ジェームズのよく用いた国際テーマ(International Theme)が取り入れられているが、初期の作品として、当時の旅行熱を反映し、風俗劇(comedy of manners)的要素を持った作品である。

II

II-1 『ある婦人の肖像』

『ある婦人の肖像』についてはどうか。

ジェームズが長い間温めていたある若い女性とその運命に対決していくという構想を小説という建築の土台として、その後広々とした屋敷に発展させていったと序文で述べられているが(x ii)、さらにジェームズはこの女性のイメージを「特定の『価値』」としている。(v ii)この比喩があまりにもつきすぎているのは作者自身の認めるところである。ジェームズが土台に置いたレンガのひとつがイザベル・アーチャー(Isabel Archer)にもた

らされた財力である。主題の中心はイザベルの意識であるが、彼女の周辺の人物の意識に大きな影響をもたらすのが、財産である。ジェイムズの作品の男性が手にする財産とは異なり、イザベルの得た財産は、彼女の生をできるだけ見ごたえのあるものにするため、彼女の知らないところで付加されたものである。経済的足枷から逃れるために与えられた、新たな枷である。

男性登場人物については、それぞれ自分の財政状況を象徴する人物として経済的視点から分類できる。キャスパー・グッドウッド(Casper Goodwood)は自ら工場経営という経済活動に携わり、財産を作り上げ、女性に対しても自分の意を通そうとするアメリカのビジネスマン、タッチェット氏(Mr. Touchett)は『黄金の盃』のアダム・ヴァーヴァー(Adam Verver)と同様にセルフメイドマンでありながら、現在は引退して、その財産を有効に使おうとしている人物、イザベルの従兄ラルフ(Ralf)は病身であることに加え、親の財産によって働く必要もなく、人生の傍観者的立場を取っている。この立場はジェイムズ自身やその父親(Henry James Sr.)の立場と関連付けて考えられる。ウォーバートン卿(Lord Warburton)は貴族として受け継いできた莫大な財産や名誉、地位を次の世代へつなぐ役目を負っている。ギルバート・オズモンド(Gilbert Osmond)は財産狙い(fortune hunter)として登場する。彼らの思惑がIsabelの生にどのように関わってくるのか、当時の社会的経済状況を分析しながら考察していく。

II - 2 経済的観点からの分析

主人公イザベルは「金銭のことで人の世話になりたくない。」(I, 48)と公言している。だからといってヘンリエッタのように職業を持ち、自立し、他人に頼らずに生活できるだけの手段を持たない。独善的な考え方の持ち主である。

主人公イザベル自身の価値について考察してみると、彼女は叔父から遺贈される以前に二人の男性によって求婚されている。アメリカにいるときから彼女を愛し、イギリスまで追いかけてきたグッドウッドとラルフの友人ウォーバートン卿である。グッドウッドはその名前にも表象されるかたくなさによってイザベルから嫌悪されている。彼はジェイムズの作品には珍しく現役のビジネスマンである。マサチューセッツ州の著名な紡績工場の所有者の息子で、父がこの工場経営で多額の財産を築く。激しい競争と不景気にもかかわらず、判断力と素質によって父に負けぬ繁栄を続けている。アメリカ人男性の登場人物は仕事からすでに引退している場合が多く、そうでない場合は妻子への経済的つながりは描かれても、実際には登場しないことが多い。これは先述した「デイジー・ミラー」や「国際挿話」(“An International Episode”)に見ることができる。彼はイザベルにとって自分

の自由を束縛する存在としてとらえられている。

一方のウォーバートン卿は地位も身分も財産もすべて手にしている、いわば理想的な男性である。資産としては年収10万ポンド、5万エーカーの土地の所有、屋敷が6つ、また国会に席を持つ。また平穩、親切であり、欠点がない一流の名士である。彼と結婚したら名門の婦人となることができ、内的、外的、両方の利点を備えている。(175)しかしその点がやはり彼女の自由を束縛するように思われ、結婚の対象からは除外される。ラルフは病身であることから、イザベルの人生に直接かかわらないこととしている。但し、自分が自らの人生に取り組むことができないため、その代理としてイザベルの人生に「風を送り」(I, 260)、彼女が人生にどう取り組むのか観察者の立場として見守ろうとしている。そのことが彼女のためになると考えているが、それが彼女を「財産狙い」たちの罠に陥らせることになるとは想定していなかった。

遺産の贈与によってイザベルの価値は変化してくる。グッドウッドやウォーバートン卿やラルフを魅了した、若く野心に満ち溢れている女性、つまりイザベル本人の魅力から、財産を持った女性、つまり付加価値の高い女性へと周囲の人間の欲望を別な形で刺激することとなる。

マルセル・モースは人間社会の基幹制度はすべて反対給付義務 (counter-prestation) に基づいて構築されているという仮説に基づいてその人類学モデルを体系化している。モースはその著書『贈与論』において「与え、受け取るという権利と義務に対応する消費と返礼という一連の権利と義務が存在している。」(39)と述べている。この「反対給付」とは贈り物に対する返礼義務のことである。贈り物を受け取った者は、心理的な負債感を持ち、「お返し」をしなければ気が済まない。

イザベルが受け取ったタレット氏からの遺産はラルフを通して彼女に与えられた贈り物ということになる。当初タレット氏が想定したよりも大きな額となったのはラルフからの働きかけによるものである。この金額の大きさが彼女にとって二重の枷となる。彼女の財産を狙うマダム・マール (Mme Merle) とオズモンドを引き寄せることとなる。彼女にとって罠をかけられる状況を作り出す。また遺産を適切に使わなければならないという心理的負債感をもたらす。彼女はこの遺産をオズモンドとの生活で使うことにより、彼にこの遺産の使用(消費)を肩代わりしてもらうこととなる。

ラルフがイザベルに遺産を送った理由は彼女に「生」の代行を行ってほしかったからであり、その行為は自らの生を他人に肩代わりしてもらうことに他ならない。それは相手の負担を考えない、相手を操作しよう (manipulate) とする行為である。

“I take a great interest in my cousin,” he said, “but not the sort you desire. I shall not live many years; but I hope I shall live long enough to see what she does with herself. She’s entirely independent of me; I can exercise very little influence upon her life. But I should like to do something for her.” ...

“I should like to put a little wind in her sails.” ... “I should like to put it into her power to do some of the things she wants. She wants to see the world for instance. I should like to put money in her purse.” ... “...I’ve left her a legacy — five thousand pounds.”

“That’s capital; it’s very kind of you. But I should like to do a little more.”

(I , 260-261)

“Her marrying — some one or other? It’s just to do away with anything of that sort that I make my suggestion. If she has an easy income she’ll never have to marry for support. That’s what I want cannily to prevent. She wishes to be free, and your bequest will make her free.” (I , 261)

直接的には登場しないが、もう一人イザベルの周辺にいる人物として彼女の父親の存在が挙げられる。彼は寛大すぎ、やさしすぎ、金銭問題に無関心すぎた。そして子供に関しては放任過ぎる立場を取り、その結果、父親としての存在感がないような状態に陥ってしまう。ジェームズの作品の設定として主人公は親子関係が希薄である場合が多い。この作品も例外ではない。

イザベルを一人の人間としてではなく、その財産の所有者としての観点から見ているのがマダム・マールとオズモンドである。マダム・マールはイザベルとかつて自分と親しい(intimate)間柄だった男性オズモンドとの結婚を画策する。マダム・マールはイザベルをオズモンドへのギフトとする。彼女の目論見はイザベルの持参金が自分の娘への利益となることである。イザベルの愛情としてパンジー(Pansy)の持参金が増加することが考えられ、ひいてはパンジーの結婚の条件が向上すると結論付けている。彼女は人間を「価値」という点から分類している。自分にとって役に立つものとそうでないものとに分類している。自らは財産を持たず、他人の厚意によって生活しているとされる立場では無理からぬことである。彼女にとって「自己(self)」とは「家や家具や衣装や読む本、付き合う仲間」などの「付属品(appurtenance)」から成り立っているとすする唯物的価値観が述べられている。

“...When you’ve lived as long as I you’ll see that every human being has his shell and that you must take the shell into account. By the shell I mean the whole envelope of circumstances. There’s no such thing as an isolated man or woman; we’re each of us made up of some cluster of appurtenances. What shall we call our ‘self’? Where does it begin? Where does it end? It overflows into everything that belongs to us — and then it flows back again. I know a large part of myself is in the clothes I choose to wear. I’ve a great respect for things! One’s self — for other people — is one’s expression of one’s self; and one’s house, one’s furniture, one’s garments, the books one reads, the company one keeps — these things are all expressive.” (I ,287-288)

彼女のこの考え方はアグニューの思考の方向性と類似している。

A commodity aesthetic may be defined as a way of seeing the world in general, and the self and society in particular, as so much raw space to be furnished with mobile, detachable, and transactionable goods. A commodity aesthetic is a point of view that celebrates those moments when the very boundaries between the self and the commodity world collapse in the act of purchase. (Agnew, 135)

オズモンドもマダム・マールも人間性、人格を経済的価値へと変換している。

オズモンドの判断基準は、自分の美意識に沿うものか沿わないもの、自分の気に入るものかいらぬもの、自分に利益をもたらすものかもたらさないものというものである。但し、イザベルの場合と異なり、彼の場合、利益を享受しても、それに対するお返し意識は全くない。孤立したディレクターである。イザベルは自分が選んだつもりではあっても、実際は選ぶように仕向けられたのである。自分の財産の有効な使い道として選んだのが、財産目当てのオズモンドとの結婚であり、その結果彼女の個性や独立心を否定されるような生活を送ることとなる。彼女は遺産相続について、次のような受け止め方をしている。彼女はこの後にも遺産の使い方についてあれこれと考える。

Isabel thought very often of the fact of her accession of means, looking at it in a dozen different lights; but we shall not now attempt to follow her train of thought or to explain exactly why her new consciousness was at first oppressive. This failure to rise to immediate joy was indeed but brief; the girl presently made up her mind that

to be rich was a virtue because it was to be able to do, and that to do could only be sweet. It was the graceful contrary of the stupid side of weakness — especially the feminine variety. To be weak was, for a delicate young person, rather graceful, but, after all, as Isabel said to herself, there was a larger grace than that. (I , 300-301)

イザベルのオズモンドとの結婚の選択には思いもよらない遺産の贈与によって生じた「反対給付」による要素もある。遺産を受け取ったことに対する心理的負債感によるものである。オズモンドの内面に気づかないまま、彼女は自分自身と贈与された財産を彼の手に乗せてしまうのである。新たな富の移譲が発生するのである。

結論

財力を示す手段は「閑暇と財の顕著な消費」であるとヴェブレンが『有閑階級の理論』で唱えている。(53) これはまさしくタチェット一家のあり方に示されている。「顕示的消費」という考え方は第2章で引用したマダム・マールの唯物史観的台詞に如実にあらわされている。

マイケル・ギルモアは登場人物が「美的価値だけではなく経済的な価値からも評価されている」「貴重な芸術品」に例えられていると評している。(51) 実際に登場人物に関して、その資産的価値があからさまな数字で表されている。例を挙げると、イザベルは当初6000ポンドの遺産の受益者であったものが、ラルフの助言により、6万ポンドの遺産を引き継ぐことになる。エドワード・ロージャ (Edward Rosier) はパンジーとの結婚資金のため自分のコレクションを5万ドルで売りに出した。ウォーバートン卿は10万ポンドの年収があるなど、人間や芸術の商品化が行われ、それぞれの価値について言及されている。ただし初期の集大成の作品とはいえ、この19世紀末の作品ということで、後期、円熟期の作品ほど人間の商品化は行き過ぎていない。

1870年代ころから大量生産が可能となり、市場が拡大され、消費が促進された。経済力の誇示のため、「顕示的消費」が進んでいく。ブローナーが「アメリカの富の力は取り付かれたように、自分の地位、あるいは自分が目指す地位を伝達するものの消費に向けられた」(21) と述べている通りである。これもマダム・マールの言葉と重なる。彼女は「自己」を象徴するものとして「付属品」を上げたが、彼女の娘であるパンジー、その父親であるかつての愛人オズモンドのステイタスを上げ、富をもたらすものとしてイザベルを選択するのである。マダム・マールという存在はジェイムズが他の作品でも造形してきたキャラ

クターである。アメリカ人でありながら、ヨーロッパ人化しており、自らは財産を持たないものの、他者の所有するものを搾取しようとする人物である。また自らの本心を主人公であるアメリカ人女性には明かそうとしない、演技する存在である。彼女についてはイザベルが「仲間の人間との直接または間接の関係においてのみ存在する」(I, 274) 人物であると評価するのは、『鳩の翼』においてミリー (Milly Theale) がケイト (Kate Croy) のことを「社交界で活躍するために生まれてきた」(I, 212) と評するのと重なりあう。『黄金の盃』においてアメリゴ (Amerigo) とシャーロット (Charlotte) がヴァーヴァー家の社交係を引き受け、それを隠れ蓑にして、配偶者を裏切るが、そのことを隠し、それぞれの家庭において社交係を務めている。但し、マダム・マールは後期の同様の人物とは異なり、その内面性についてはあまり言及されておらず、ただイザベルをかつての愛人であるオズモンドと彼との間の娘パンジーのために利用しようとし、また財産と地位目当てでパンジーとウォーバートン卿との結婚を画策し、結局自らもオズモンドに利用される人物として描かれている。一方でジェイムズの作品に表れる経済的側面のうち、『ある婦人の肖像』はやはり初期の作品であり、後期の作品ではさらなる登場人物の商品化、コレクション化がさらに進行していくこととなる。

付記

本稿は、2010年10月9日、日本アメリカ文学会第49回全国大会で行った発表に加筆修正を加えたものである。

Works Cited

- Agnew, Jean-Christophe. "A House of Fiction: Domestic Interiors and the Commodity Aesthetic" *Consuming Visions: Accumulated and Display of Goods in America 1880-1920*, ed. Simon J. Bronner New York: Norton, 1989: 133-156
- Berland, Alwyn. *Culture and conduct in the novels of Henry James*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981
- Bronner, Simon J. "Introduction," *Consuming Visions*: 1-13
- . "Reading Consumer Cultures," *Consuming Visions*, 13-55
- Edel, Leon. *Henry James, a Life*. London, 1987
- Gilmore, Michel T. *American Romanticism and Marketplace*. Chicago: The University of Chicago Press, 1985
- James, Henry. *The American Scene*. London Hart-Davis, 1968

- . *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers
New York: Oxford University Press, 1987
- . *The Portrait of a Lady*. New York: Charles Scribner's Sons, 1908
- Pearson, Maeve. "Re-exposing the Jamesian Child: The Paradox of Children's
Privacy" *Henry James Review* 28 (2007): 101-119
- Rawlings, Peter. "Vital Illusions in *The Portrait of a Lady*" *A Companion to Henry
James* ed. Greg W. Zacharias Wiley-Blackwell, 2008

ジンメル, ゲオルグ 『ジンメル・コレクション』鈴木直訳 東京 筑摩書房 1999年

岩井克人 『ヴェニス of 商人の資本論』東京 筑摩書房 1992年

モース, マルセル 『贈与論』吉田禎吾・江川純一 訳 東京 ちくま学芸文庫 2009年